

明治期新作雅楽唱歌（保育唱歌）の音楽的性格

——明治初期における和洋折衷唱歌の具体——

The Musical Features of *Gagaku-Shōka* in Meiji Era (*Hoiku-Shōka*)

本 多 佐保美

Sahomi HONDA

はじめに

明治という時代は、それ以前の江戸文化が本当に成熟し花開いた時代とも言われ、また一方では西洋文明による近代化の波が押し寄せてきた時代でもあり、音楽教育の歴史の上でも教育上の諸制度が確立していく時代として非常に重要なターニングポイントとなっている。このような時代にあって、明治12年の音楽取調掛（のちの東京音楽学校、現在の東京芸術大学音楽学部）設立以前にすでに、唱歌教育のいくつかの試みが行われていたが、東京女子師範学校附属幼稚園における「保育並ニ遊戯唱歌」、通称「保育唱歌」教授の試みは、ある程度まとまりのある教材と方法とによって継続的に行われた唱歌教授の嚆矢として注目されるものである。

「保育唱歌」とは東京女子師範学校の依頼を受けた宮内省式部寮雅楽課の伶人たちが、明治10年から13年にかけて創作した約100曲の唱歌であり、《君が代》をその中に含むことで有名である。従来の「保育唱歌」に対する評価には例えば、「子どもの日常生活とはかけ離れた歌であり、歌詞の意味もどこまで理解できたか疑問である、また旋律も長く優美であることが幼児にはふさわしくないものだ¹⁾」というものがある。しかし一方で、芝祐泰は、実際に「保育唱歌」の作曲に携わった芝祐夏を父に持ち、自身も長年宮内庁楽部に勤め雅楽の演奏と研究とに精進した立場から、「保育唱歌」を評価している。芝祐泰は「保育唱歌」について、「古来の雅楽家は新時代に応じて我が国の作曲界に先鞭をつけた」とし、また伴奏の和琴は「一見古式の和琴譜ではあるが、千年来伝統のある和琴手法から離れたいわゆる『新楽唱歌』に添えて弾ずる為の新案による」ものであるとして、「保育唱歌」を伝統的な雅楽の在り方とは一線を画した新しい曲として評価している²⁾。本研究でも唱歌の子どもにとっての教育的意味という視点ではなく、明治という新時代に西洋の新しい音楽文化と出会った人々が、自己の内に培われた伝統音楽の音楽性との融合をどのように果たしていったか、という視点で「保育唱歌」を再評価したいと考える。

1. 保育唱歌の成立とその普及

【表1】は、「保育唱歌」の成立とその普及について先行研究³⁾に基づいてまとめたものであり、これによって保育唱歌撰譜（撰譜とは作曲のことである）までの過程とその後の広まりについて概観できる。

【表1】「保育唱歌」関係年表〔M=明治〕

宮内省式部寮雅楽課	東京女子師範学校および附属幼稚園	音楽取調掛	保育唱歌の普及/その他
M3.11. 雅楽局制定。 M7.12. 宮中行事での奏楽の必要から15才以上40才以下の28名が西洋音楽伝習を命じられる。海軍軍楽隊に出向き楽譜の読み書きを学び始める。 M8.2. 35名のメンバーが出揃う。 M9.4. 注文していた楽器がロンドンから到着。 M9.11.3. 天長節にて西洋音楽を初演奏。 M10.11.13. 東儀季熙による《風車》《冬燕居》が上申された。 M12.3. 芝葛鎮、東儀季芳、奥好義、小篠秀一の4名、ピアノの伝習を命じられる。 M13.4.24. 公開演奏会である「雅楽稽古所大演習」で雅楽、西洋音楽と並んで「保育唱歌」演奏される。 M13.5. 「保育唱歌」を雅楽課の日課に加え習練することになる。伶人は5年間で25曲を習得。 M16.4. 一般学校への普及のため出版の建議がなされるが実現せず M16.7.11. 《花橋》《鏡山》《フリヌルフミ》等6曲を『小学唱歌集』に入れるよう推薦。 《花橋》は採用される。	M9. 関信三『幼稚園記』を、桑田親吾『幼稚園』を訳す。 M9.11.16. 附属幼稚園設立。 M10.9. 式部寮に唱歌作曲を依頼 M10.11.27. 附属幼稚園開業式。皇后宮の行啓。 M11 ~幼稚園保母、保育唱歌伝習。 ・幼稚園生徒24名、東京女子師範学校生徒22名が参加する。 ・保育の中で毎週木曜日30分「唱歌」の時間、毎日1時間半「遊戯」の時間。	M5.8. 学制頒布。 唱歌「当分のヲ欠ク」 M12.10.23. 音楽取調掛設立。 M13.6. 女子師範及び幼稚園で使用の唱歌を取調べたき旨、依頼 M13.10. 芝葛鎮、文部省御用掛を兼務。 M14.2. 上真行、奥好義、辻則承文 都省御用掛を兼務。 M15. 『小学唱歌集』初編、刊行。 M20. 『幼稚園唱歌集』刊行。保育唱歌より《風車》採用される	M12 ~鹿児島幼稚園設立。保育唱歌用いられる。 M12.10~学習院で保育唱歌教授される。 M13?大阪市立愛珠幼稚園で用いられた。 M14.1. 八戸の堀端小学校開校式で中学生徒《冬燕居》等を歌う。 M16?京都で『唱歌の手飛かへ』として印刷される。 M19. 市川八十吉編『幼稚園唱歌』として出版。歌詞のみ掲載。

1. 1. 宮内省式部寮雅楽課における動向

雅楽課では、東京女子師範学校から「唱歌を新作してほしい」との要請に答えて、東儀季熙の手になる《風車》、《冬燕居》の2曲が初めて上申されたのが、明治10年11月13日であった。それ以前に雅楽課の35名がすでに西洋音楽、すなわち軍楽、吹奏楽を伝習していたという状況であった⁴⁾。

また、明治12年より「雅楽稽古所大演習」として公開演奏会が春秋に開催され、雅楽の古典曲及び欧州楽（新しく伝習しつつあった西洋音楽）の公開演奏が行われたが、明治13年4月から「保育唱歌」もそのレパートリーとして加えられ演奏された。東京女子師範学校附属幼稚園の生徒および師範学校生徒も演奏に参加しており、例えば明治13年4月24日には、幼稚園生徒24名が《冬燕居》、《遊行》、《園ノ遊》、《民草》を、東京女子師範学校生徒21名が《春日山》、《菊ノ挿》、《花橋》、《寒夜》を歌った⁵⁾。公開演奏会では、伴奏楽器としてオリジナルの形である和琴と笏拍子のみでなく、琵琶、箏、龍笛、箏、笙も加えられた。

1. 2. 音楽取調掛との関わり

明治12年10月に設立された音楽取調掛では、新しい唱歌集（教材集）を作成するにあたり、東京女子師範学校が既に用いていた「保育唱歌」について取調べたい旨、女子師範に問い合わせている。また雅楽課の伶人で「保育唱歌」作曲に携わった芝葛鎮、上真行、奥好義らが文部省御用掛を兼任して勤め、音楽取調掛の事業にも関わるようになった。したがって音楽取調掛でも「保育唱歌」作成の手順等⁶⁾を充分把握して、そのノウハウは『小学唱歌集』の編纂にも生かされたと考えられる。明治16年に、《花橋》、《鏡山》、《フリヌルフミ》、《山時鳥》、《風車》、《野山ノ遊》の6曲を『小学唱歌集』に編入したいとの申し出がなされたが、最終的には《花橋》が《橋》として『小学唱歌集』第三編に採用されるにとどまった⁷⁾。歌詞は保育唱歌の時の歌詞とは違うものとなっている。その後、明治20年刊行の音楽取調掛による『幼稚園唱歌集』（タイトルに幼稚園とあるが、小学校低学年の教材としても使われた）には「保育唱歌」から《風車》が1曲採用された。

1. 3. 「保育唱歌」の各地への普及

明治10年代前半頃より、「保育唱歌」は各地で教授された。学習院では明治12年から雅楽課の伶人により「保育唱歌」が教授された。また地方では東京女子師範学校の卒業生らを中心に「保育唱歌」が教えられていく。例えば明治14年1月22日、八戸の堀端小学校開校式で、中学生徒が《冬燕居》、《花橋》、《風車》を歌った記録がある⁸⁾。また、各府県が各地で唱歌教育を始めるにあたり、楽器購入等の問い合わせが音楽取調掛に続々と入るようになるのだが、その中で秋田県は明治17年2月に「六弦琴三面、琴佐木二個、雅楽用爪六目」を問い合わせている⁹⁾。六弦琴は和琴のことであり、琴佐木は和琴のピックのことである。つまり秋田では「保育唱歌」を教授しようとして、それに必要な伴奏楽器購入を音楽取調掛に問い合わせたわけであるが、残念ながら取調掛は「応じられない」との返答をしている。また別の事例として、大阪市立愛珠幼稚園では開園当初から「保育唱歌」が教えられ、明治30年の保育日誌にも『幼稚園唱歌集』等にある遊戯唱歌とともに、「保育唱歌」の中から《民草》と《盲想》の2曲が行われていた記録がある¹⁰⁾。

1. 4. 「保育唱歌」の楽譜の広まり

「保育唱歌」の墨譜（「保育唱歌」は五線譜ではなく、雅楽の伝統的な楽譜で記されている）は、以下のところで所蔵または収録されている。

- ①豊原喜秋写『保育唱歌譜』写本期不明、上野学園日本音楽資料室所蔵、豊家楽譜目録36
- ②奥 好義写『保育並ニ遊戯唱歌譜』写本期不明、芝祐泰写、『音楽基礎研究文献集』第15巻、大空社、1991年、所収
- ③清水たづ写『保育唱歌』明治16年写、お茶の水女子大学附属図書館所蔵
- ④音楽取調掛『保育唱歌譜』明治13～14年写？、東京芸術大学附属図書館所蔵
- ⑤稲葉与八写『保育唱歌』昭和11年写、上野学園日本音楽資料室所蔵、稲葉氏旧蔵楽書類（三田小松子による明治18年の写本をさらに書き写したもの）

このうち、①②は「保育唱歌」の作曲に関わった雅楽家たちによる写本、③は「保育唱歌」を伝習した東京女子師範学校に残る写本、④は音楽取調掛に残る写本である。⑤は雅楽の好事家で研究家であった稲葉氏が昭和11年に写したものであるが、そのもともとの唱歌譜は三田小松子により明治18年写本とある。三田小松子がどのよ

うな人物であったかは不明であるが、おそらく東京女子師範学校の卒業生かあるいは何らかの形で「保育唱歌」を伝習した者であろう。明治の頃は、教科書や楽譜を手書きで書き写すことが当たり前であったので、このような形で「保育唱歌」が広まっていった道筋も考えられる。

また印刷・出版の形では、明治16年、京都で『唱歌の手飛かへ』として印刷され、あるいは明治19年、市川八十吉編『幼稚園唱歌集』として出版された例（歌詞のみが掲載された）が報告されている。¹¹⁾「保育唱歌」は文部省・音楽取調掛から出版されることはかなわなかったが、地方であるいは私的な形では出版され広まっていった。

2. 保育唱歌の音楽性

2. 1. 西洋原歌との関わり

次に「保育唱歌」の音楽的特質について見ていきたい。まず「保育唱歌」作成にあたって参考にされた西洋原歌との関わりについてである。「保育唱歌」がフレール式幼稚園教育書の中のどの曲を直接参考にして作られたかということについては、藤田美美子（1978）、外山友子（1978）の先行研究によってすでに明らかにされている。国会図書館所蔵の以下のような原著、及びその翻訳書に基づいて「保育唱歌」は作成されていった。

①DOUAI,D.Adolf (1872) *The Kindergarten*. New York.(4th edition)

②PEABODY,Elizabeth P; MANN,Horace (1876) *Moral Culture of Infancy and Kindergarten Guide*. New York.(6th edition)

〔①と②の訳本、関信三訳『幼稚園記』1巻～3巻、東京女子師範学校発行、明治9～10年〕

③RONGE,Johan;RONGE,Bertha (1877) *A Practical Guide to the English Kindergarten*. London.(10th edition)

〔③の訳本、桑田親五訳『幼稚園』文部省発行、明治9～11年〕

④著者不明 (1874) *Plays and Songs for Kindergarten and Family*. New York.

特に唱歌の歌詞を作成する際には、西洋原歌の歌詞を翻訳したり、大意をとってそれに見合う日本の古歌を当てはめたりと参考にしている。一方、旋律を作る時には西洋原歌をほとんど参考にしていないかに思われるが、曲の拍数を原歌と同じにしてある曲が数曲見出される。例えば遊戯唱歌（唱歌を歌いながら、身体を動かす遊戯を伴うもの）の《風車》の冒頭には「三十二歩、但拍子ノ数、西洋原歌ニ随フ」との但し書きがある。次に挙げる【表2】の曲は西洋原歌の拍数と「保育唱歌」の拍数が一致する例である。なお今回、①DOUAIの国会図書館所蔵の本が修理中のため閲覧できなかつた。遊戯唱歌の《盲想》（保育唱歌拍数56歩、西洋原歌曲名《Guessing the singer》）、《窮鼠》（保育唱歌拍数56歩、西洋原歌曲名《Cat and Mouse》）などは①DOUAIの本に記載されている西洋原歌に基づいていると考えられるが、今回は確認することができなかった。

【表2】西洋原歌との関連

	保育唱歌曲名	保育唱歌拍数	西洋原歌曲名	西洋原歌拍数
遊戯唱歌	風車	32歩	The Windmill	2 / 4 拍子で16小節、♩が32拍
	遊行	64歩	The Wheel-barrow	2 / 4 拍子で16小節、♪が64拍
唱歌	冬燕居	拍数24	Winter	3 / 4 拍子で8小節、♩が24拍
	兄弟ノ友愛	拍数96	The Pleasant Sight Brotherly Love 〔タイトルは異なるが同じ曲〕	4 / 4 拍子で24小節、♩が96拍
	ヨヨノオヤ	拍数48	The Happy Home Load's Prayer 〔タイトルは異なるが同じ曲〕	2 / 4 拍子で24小節、♩が48拍

【楽譜1】《風車》の西洋原歌《The Windmill》

See the wind-mill how she goes, While the wind so brisk-ly
blows; Al-ways turn-ing freo-ly round, No-er i-dle is she found.

参考までに《風車》の西洋原歌の楽譜【楽譜1】（③RONGEより）と、「保育唱歌」の《風車》の五線譜化した楽譜【楽譜2】とを挙げておく。

【楽譜2】保育唱歌《風車》

カザグル マ カゼ ノ百
 マ ニ マ ニ メ グ ル ナ リ百
 ヤー マズ メ グ ル モ
 ヤ マズ メ グー ル ニ モ

楽のうたいもの（歌曲）で従来用いられている伝統的な墨譜で書かれていることである（その実例は【楽譜3】、【楽譜4】に挙げる）。墨譜はたて書きで、宮商角徴羽で音を表すとともに、旋律の動き、音の高低、ユリや突きの技法による声の動きなどを、歌詞の左側に書かれた直線や曲線で表している。フレーズの区切れは、歌詞に付けた縦線のつながりで表している。・や○や百で、拍節を表す。百は^(しゅう)拍子^(めいし)を打つ箇所を示している。

次に楽曲の構成であるが、長い楽曲の中には、一段、二段、三段……という構成になっているものがある。例えば《民草》は八段、《桜》は三段、《王昭君》は五段から成り、段によって旋律が異なる楽曲もある。拍子は一段、二段……は閑（しず）拍子、終段は早（はや）拍子となっている。雅楽では各楽章を指して「帖」という用語が用いられることがあるが、「段」という用語は箏曲で《六段》や《八段》といった楽曲があるように、日本音楽において楽曲の一部分を指して用いられる用語である。

さらに、雅楽の伝統的な音楽性との共通点として、調子と季節の関係が挙げられる。雅楽の調子は象徴的に春夏秋冬と結び付けて考えられて来た。これは陰陽五行思想と関係があり、^(そうじょう)双調は春、^(おうしきちょう)黄鐘調は夏、^(ひょうじょう)平調は秋、^(ばんしきちょう)盤渉調は冬の調子とされている。現在でもこの伝統は残っていて、例えば秋には平調の曲をプログラムに組むといった形で現れる。「保育唱歌」でも、ある季節の曲をその調子で作曲している例が見出された。【表3】にまとめたように、各調子の3割ほどはその象徴する季節の曲となっている。

【表3】調子と季節との関係

双調 春 (そうじょう)	51. 百鳥 98. 春	53. 隅田川 104. 花見之駒	56. 春ノ山辺	57. 桜
黄鐘調 夏 (おうしきちょう)	64. 花橘 99. 夏	68. 苗代水	70. 山時鳥	71. 山下水
平調 秋 (ひょうじょう)	22. 秋の日影 100. 秋	23. 元ハ早苗	26. 菊ノカザシ	
盤渉調 冬 (ばんしきちょう)	73. 冬燕居 101. 冬	74. 寒夜	79. 富士山	80. 王昭君 102. 山家

(注) 番号は藤田美美子 (1978) の一覧表に従う

2. 2. 雅楽の伝統的な音楽性との関わり

さてそれでは、「保育唱歌」の音楽性と雅楽の伝統的な音楽性との関係はどうであろうか。

2. 2. 1. 雅楽の伝統的な音楽性との共通点

雅楽課の伶人たちによって作られた「保育唱歌」は、彼らの親しんできた雅楽の音楽性から発想された部分が多い。まず第一に、「保育唱歌」の楽譜は、雅

【楽譜3】保育唱歌墨譜

《チチコソ》 卷越調律旋、七声唱歌、早四拍子、拍子十

壹越調律旋
チチコソハ
拍子十

【楽譜4】保育唱歌墨譜

《人ノ道》 卷越調律旋、七声唱歌、閑四拍子、拍子八

壹越調律旋
人ノ道

2. 2. 2. 雅楽の伝統的な音楽性との相違点

では、「保育唱歌」の新しさはどこにあるのだろうか。それを考えるにあたって、①音組織、②拍子、③伴奏楽器の3点について考察する。

資料として、以下の手順で「保育唱歌」の五線譜と「骸骨図」を作成した。まず芝祐泰による五線譜（「保育並ニ遊戯唱歌 現代的五線譜」、『音楽基礎研究文献集』第15巻、大空社、1991年、所収）を、墨譜（奥好義写、芝祐泰写「保育並ニ遊戯唱歌譜」同書所収）と突き合わせ確認していった。細かい装飾音は音の骨格をとらえる上ではかえって煩雑になるので、ユリや突きなど、声をゆらす技法の部分は省略して記譜した。久保正美の記譜の方法（久保正美1993）に従って、ユリは \oplus と書き、突きは \lrcorner のマークを書く。さらに曲中にあらわれる音の動き全体を見るために、柴田南雄の提唱する「骸骨図」¹²⁾にして表した。また比較のため、雅楽の伝統的なうたいもののうち、拍節的な歌曲である催馬楽^(さいばり)2曲を取り上げた。

①音組織、音の動きについて

「保育唱歌」は【楽譜5】に示した音階（〇〇調〇旋）をまず理論的に考え、それに基づいて作曲されている。律旋には^(いちごつちよう) 壹越調、^(ひょうちよう) 平調、^(そうちよう) 双調、^(おうしきちよう) 黄鐘調、^(ばんしきちよう) 盤渉調の五つが、呂旋には^(いちごつちよう) 壹越調、^(ひょうちよう) 平調、^(そうちよう) 双調、^(おうしきちよう) 黄鐘調の四つがある。この音階は、結局律と呂の二つに集約される。すなわち、律旋は下から長2度、短3度、長2度、長2度、短3度（宮-商-角-徵-羽）という音程関係、呂旋律は下から長2度、長2度、短3度、長2度、短3度（宮-商-角-徵-羽）という音程関係である。そして理論的には7音を定めたにもかかわらず、実際の曲の中ではまったく、あるいはほとんど用いられない音がある。律旋の嬰商の音である。嬰商の音は律旋の唱歌のうち、平調律旋《教ノ道》1曲に出てくるのみである。呂旋では変徵と変宮の音である。このことは理論的に音階を規定しながらも、曲をつくるに当たって自分たちの音感覚に忠実に作曲した結果、ふだん接している伝統的な雅楽の音の動きに近い旋律が生み出されたのだと言える。

また各調についても用いられる頻度に偏りが見られ、特に壹越調呂旋、平調呂旋は100余曲の中で、1曲ずつしかない。壹越調呂旋は《夏山》、平調呂旋は《ミチノク山》であるが、《夏山》では律角の音が、《ミチノク山》では律角と嬰羽の音があらわれている。これは呂旋と律旋が混合している例と考えられる。壹越調や平調の音の並びでは呂旋をつくりにくく、自から律旋の音の並びが出現してしまったものであろう。

次に、「骸骨図」によって音の動きを把握する。【図1】の①、②は伝統的な雅楽のうたいものである催馬楽^(こまがえ)の《更衣》と《安名尊》の「骸骨図」である。また【楽譜6】は《更衣》の五線譜（部分）である。両者とも、旋律の動きがパターン化していて、下降音型が多く、跳躍は下の音域から上の音域へという傾向が見られる。《更衣》は律の催馬楽、《安名尊》は呂の催馬楽と言われるが、実際の音は両者とも同じ音程関係の音のめぐりになっている（《更衣》の宮-羽-徵 = e - c - h、《安名尊》の律角-商-宮 = c - a b - gなどの動き）。《安名尊》でも音階が都節化し、徵の核音支配が弱まって徵の音が半音下がった形になっている。

「保育唱歌」における音の動きも、跳躍は下の音域から上の音域に向かい、それがフレーズの切れ目にあらわれる。そして順次下行する。また、特に律旋において上行の音の動きと下行の音の動きが異なり、上行の時は徵

【楽譜5】「保育唱歌」の音階

●は実際にはあらわれない音

律旋

壹越調

平調

双調

黄鐘調

盤渉調

呂旋

壹越調

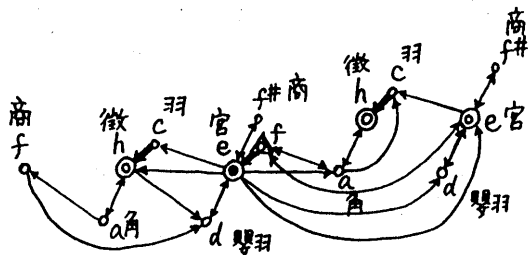
平調

双調

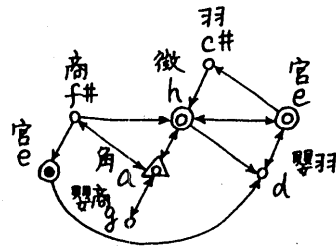
黄鐘調

【図1】「骸骨図」

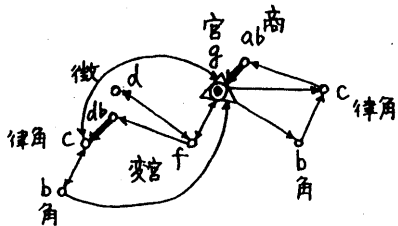
① 律の催馬楽さいばら<<更衣ころもがえ>>



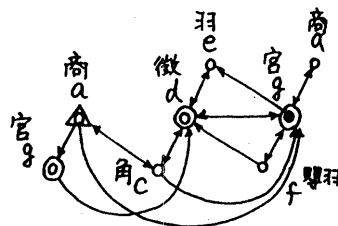
⑥ <<教ノ道>>平調律旋、七声唱歌、早四拍子、拍子十四



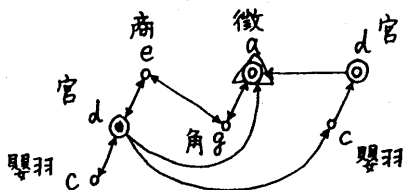
② 呂の催馬楽さいばら<<安名尊あなとう>>



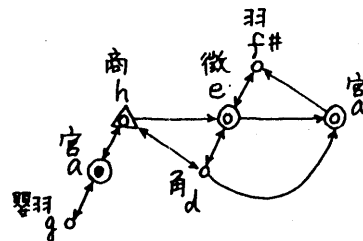
⑦ <<イロハ>>双調律旋、七声唱歌、早四拍子、拍子七



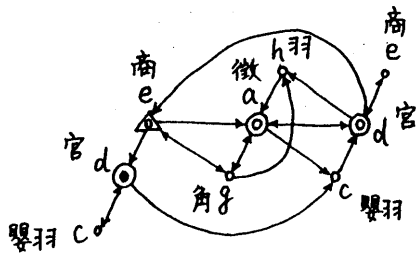
③ <<チチコ>>沓越調律旋、七声唱歌、早四拍子、拍子十



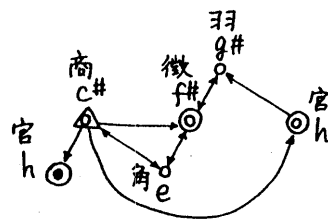
⑧ <<花橘>>黄鐘調律旋、七声唱歌、早四拍子、拍子八



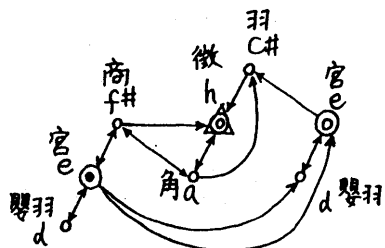
④ <<人ノ道>>沓越調律旋、七声唱歌、閑四拍子、拍子八



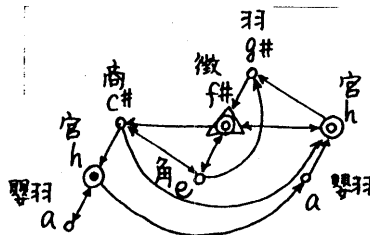
⑨ <<冬燕居>>盤涉調律旋、五声唱歌、早四拍子、拍子十二



⑤ <<菊ノカザシ>>平調律旋、七声唱歌、早四拍子、拍子十四

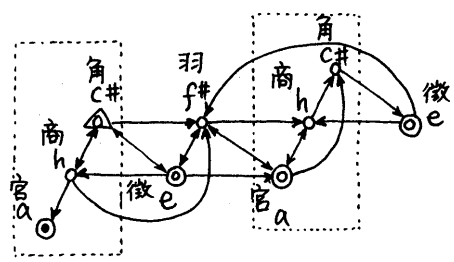
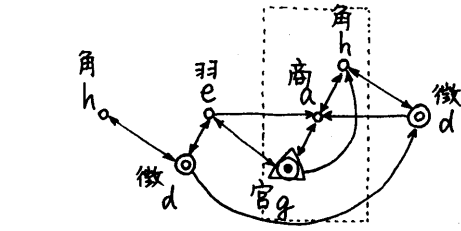


⑩ <<寒夜>>盤涉調律旋、七声唱歌、早四拍子、拍子十

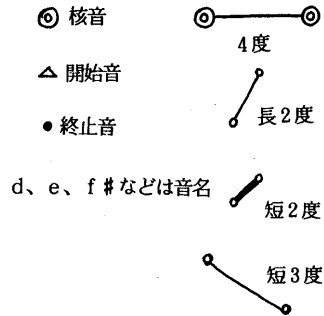
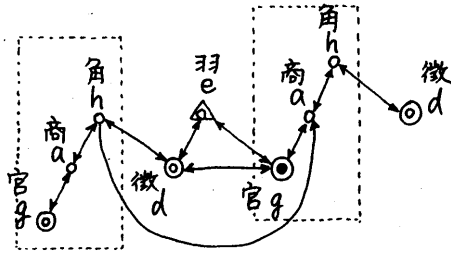


⑪ 《我行末》双調呂旋、七声唱歌、早四拍子、拍子十八

⑬ 《ヨヨノオヤ》黄鐘調呂旋、高等唱歌、早四拍子、拍子十二



⑫ 《梓弓》双調呂旋、高等唱歌、閑五拍子、拍子七



一嬰羽一宮 (a-c-d など)、下行の時
は宮一羽一徵 (d-h-a など) となっ
ている。核音支配については、宮と
徴との支配が強く、4度の枠では
なく5度の枠が強くなっている。徴
の音はユリになることが多く、音
が長く伸ばされ装飾される。こう
した特徴は雅楽の伝統的なうたい
ものと同じである。

「保育唱歌」の律旋と催馬楽の音の
動きはほとんど共通するが、催馬
楽では核音 (宮や徴) のすぐ上の
音が、短2度であり (《更衣》に
おける f# の音は突きの動きの中
でのみあらわれる音)、音階は都
節化している。一方、まず理論的
に音階を考えた「保育唱歌」では
、核音 (宮や徴) のすぐ上の音は
長2度となっていて、いわゆる律
音階を保っている点異なる。

【図1】の「骸骨図」の③から⑩
までは「保育唱歌」の律旋、⑪⑫⑬
は「保育唱歌」の呂旋でまとめて
ある。この⑪⑫⑬の呂旋は、律旋
や雅楽の伝統的なうたいものの
「骸骨図」とは違った動きをして
いる。角一商一宮 (h-a-g) とい
った宮音に対して3度上から順次
下行していく動き (点線の四角で
囲った部分) が見られることであ
る。ここに呂旋の音の動きの特
徴がある。これはのちの学校唱

【楽譜6】 律の催馬楽さいばら《更衣ころもがえ》 (付所つけどころから)

【楽譜7】 《我行末》双調呂旋、七声唱歌、早四拍子、拍子十八

【楽譜11】《冬燕居》盤渉調律旋、五声唱歌、早四拍子、拍子十二
(拍子六を2回くりかえす)

催馬楽の和琴譜が明治撰定譜(明治になって集大成された雅楽曲のスタンダード楽譜)にはあるが¹⁸⁾、現在では催馬楽に和琴は用いられない。また、江戸時代には唐楽の管絃(主に器楽曲。対概念は舞楽)の曲に和琴を入れて演奏していたことが現在残っている楽譜からわかるが、これも現在では用いられない¹⁹⁾。明治以前、江戸の頃には雅楽の中の各ジャンルとそれに用いられる

楽器との対応が現在ほど厳密で固定的でなく、和琴も上代歌舞に限らずもっと自由に用いられていたようである。そして唐楽での和琴の用法は、旋律の音の高さを厳密にはなく、おおよそなぞっていくもので、「保育唱歌」での用法に似ている。「保育唱歌」の和琴は上代歌舞での用法よりむしろ江戸時代に唐楽の管絃で用いられた和琴の用法を引き継いでいると考えられる。

和琴の奏法は、十三弦の箏とは違い右手は箏のように爪をはめず、へらのような「琴軋」^(にこまぎ)を使って弦を手前から向こうへ、また向こうから手前へとカラカラとかき鳴らしていく。左手はかき鳴らした弦のどの音の余韻を残すかを調節する。また2本の弦を同時に鳴らすツムという奏法などがある。筆者も所属する小野雅楽会で和琴に実際に触れて演奏してみたが、実際やってみると、例えば4小節のパターンならば比較的簡単に覚えてしまうことができる。箏だと13本の弦の名称と位置を覚え、弦と弦の間隔を手の感覚に覚え込ませることが必要で、楽器をなめらかに奏するまでにはかなりの時間を必要とする。和琴はもっと短時間で弾くことができるようになって感じた。その奏法の簡易さからも、「保育唱歌」の伴奏楽器として和琴が用いられたのではないだろうか。

結 び

本研究では、明治という新時代に、伝統的な雅楽の素養を身につけた伶人たちが、西洋音楽もすでにくらか伝習する中で、「新作唱歌」として「保育唱歌」をどのように作ったのかという問題意識から、「保育唱歌」の音楽的性格について検討した。まとめとして次の3点を挙げる。①「保育唱歌」撰譜にあたり、音階を理論的に定めて作曲を行ったが、実際にあらわれた音の動きは伶人たちが慣れ親しんだ雅楽の旋律に近いものになっている。ただし、呂旋、特に双調や黄鐘調の呂旋はのちのち学校唱歌で多用されたヨナ抜き長音階の音の動きと同じ動きを示している。②従来の伝統的なうたいものの声を長く伸ばす歌と比較して、「保育唱歌」の特に早拍子の曲はシラビックな歌を指向するものとなっている。③伴奏楽器として用いられた和琴は、御神楽など上代歌舞での用法よりむしろ、江戸時代の唐楽の管絃における和琴の用法を下敷きに、新作唱歌に適するようなパターンがつけられた。その奏法が比較的容易であることも、和琴が伴奏楽器として採用された理由の一つではないか。

(付記) 本稿は、第25回日本音楽教育学会(1994年10月8日、東京学芸大学)における口頭発表をもとに、加筆・修正してまとめたものである。

<注>

- 1) 山住正己(1967)『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会、19頁。
- 2) 芝祐泰(1955)「保育並遊戯唱歌の撰譜」『音楽基礎研究文献集』第15巻、大空社、1991年、14頁。
- 3) 「保育唱歌」に関する先行研究には、前掲の芝祐泰(1955)のほか、以下のものがある。(年代順)
・平出久雄(1943)「『保育唱歌』覚え書——附・国歌『君が代』小論考」『東亜音楽論叢』山一書房
・藤田美美子(1978)「保育唱歌研究——フレーベル式幼稚園唱歌遊戯移入の経過を中心として」『国立音楽大学

創立五十周年記念論文集』

- ・外山友子（1978）「幼稚園唱歌事始」『東洋音楽研究』第43号
- ・伊吹山真帆子（1979）「保育唱歌について」『東洋音楽研究』第44号
- ・今井民子（1983）「フレーベルの歌遊び—その特質と我国の幼児音楽教育に及ぼした影響について」『音楽教育学』13号
- ・久保正美（1993）「『保育唱歌』における雅楽と洋楽の影響——『保育唱歌』の和琴伴奏について」日本民俗音楽学会口述発表資料
- 4) 塚原康子（1993）『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』多賀出版、232頁以降。
- 5) 塚原康子（1993）前掲書、566頁。
- 6) 「保育唱歌」の作成にあたっては、フレーベル式幼稚園教育書の原典およびその翻訳書（関信三『幼稚園記』、桑田親吾『幼稚園』）を参考に、歌詞の訳出や新作を行っている。そのプロセスは藤田美美子（1978）前掲論文に詳しい。
- 7) 「小学唱歌集」には「保育唱歌」から直接採用された曲以外に、「保育唱歌」に曲風が類似した曲が数曲ある。例えば第三十九<<鏡なす>>、第四十七<<天津日嗣>>、第六十七<<白蓮白菊>>など。
- 8) 日本近代音楽史研究会編（1995）『明治期日本人と音楽』所収の「東京日日新聞」の記事より。この例のように「保育唱歌」は幼稚園児が歌ったのみならず、小学校、中学校生徒も歌った唱歌であった。
- 9) 東京芸術大学音楽取調掛研究班編（1976）『音楽教育成立への軌跡』音楽之友社、424頁。
- 10) 福原昌恵（1992）「1897年の愛珠幼稚園における保育内容—唱歌遊戯を中心として」『新潟大学教育学部紀要』第34巻、第1号。その他、愛珠幼稚園が編集した『所蔵目録』（1969）（上野学園日本音楽資料室所蔵）には、東京女子師範学校撰「唱歌」写本4冊、和琴之譜、楽器として笏拍子、和琴、琴柱などが挙げられている。
- 11) 藤田美美子（1978）前掲論文、352頁。
- 12) 「骸骨図」については、柴田南雄（1978）『音楽の骸骨のはなし—日本民謡と12音階の理論』音楽之友社、参照。
- 13) 芝葛鎮筆「保育唱歌」序文より。芝祐泰（1955）前掲論文、19頁。
- 14) 同上
- 15) 増本喜久子（1968）『雅楽—伝統音楽への新しいアプローチ』音楽之友社、318頁。
- 16) 久保正美（1993）前掲発表資料、参照。
- 17) <<民草>>一段と<<学道>>、<<菊カザシ>>と<<ハハソバ>>、<<元ハ早苗>>と<<秋ノ日影>>、<<花橘>>と<<白カネ>>と<<鹿嶋神>>で共通の和琴のパターンが用いられている。
- 18) 平野健次、福島和夫編（1977）『日本音楽・歌謡資料集』勉誠社、68頁。
- 19) 豊氏本家蔵楽書類『和琴譜（唐楽用）』、上野学園日本音楽資料室所蔵。